

# 大豆栽培の基本技術

令和7年6月  
大里農林振興センター

## 里のほほえみの栽培暦

	6月	7月	8月	9月	10月	11月
生育ステージ	は種		開花		成熟期	収穫期
各種作業	は種・除草剤散布	中耕	中耕	重点防除期間		収乾燥・調製



## 栽培のポイント

### 1 ほ場の選定について

- ・湿害のない、排水良好のほ場を選定する。
- ・雑草の多発するほ場は避ける。近年、防除の難しいアサガオ類が侵入してきているため、発生に注意する。

### 2 排水対策

- ・大豆は湿害に弱いので、弾丸暗きょや深耕等の排水対策を行う。
- 【額縁明渠の設置のポイント】
- 排水口へつながっているか
- 明きょは逆勾配になったり、途中で埋まったりしていないか
- 明きょの深さは最低 20 cm、できれば 30 cmになっているか

### 3 砕土、耕うん

- ・大豆の出芽に良好な砕土率（2 cm以下の土塊の割合 70%程度）を得るように耕うん、砕土は丁寧に行う。
- ・車速を遅めるほど、高 PTO ギアに入れるほど砕土率が高まる。
- ・砕土が悪いと出芽不良や除草剤の効果が劣るが、細かくしすぎると、降雨で表層にクラスト（土膜）が形成され、出芽不良となる。
- ・耕うんからは種、除草剤散布は同日に終わるよう計画する。

### 4 施肥

- ・基肥は窒素 3-リン酸 10 カリ 10 kg/10a とする。
- ・地力が低い場合は、たい肥を施用する。

### 5 は種

- ・種子消毒を行う。6月中旬以降には種する。
- ・は種量を日に応じ調節する。苗立ちが少ないと、減収するだけでなく着莢位置が低くなり、収穫ロスが大きくなる。

（量の目安：条間 70~80cm の場合）

- 6月下旬：5~6kg/10a（株間 8.0~11.5cm 程度）
- 7月上旬：6~7kg/10a（株間 8.0~9.5cm 程度）
- 7月中旬：8~9kg/10a（株間 5.5~7.0cm 程度）
- 7月下旬：10~11kg/10a（株間 4.0~5.0cm 程度）

- ・は種深は、3cm を基準に乾いているときは少し深く、湿っているときは少し浅くする。翌日以降の天気も考慮して作業する。
- ・条間 30~40cm の狭畦栽培の場合は、株間を倍程度に広げ、面積当たりの播種量は変わらないようにする。

### 6 雑草防除

- ・毎年同様に管理すると、特定の雑草種が蔓延しやすい。＜参考＞を参照し、多発している雑草種に応じた対策を行う。
- ・中耕の雑草防除効果は、畝間には高いが、株間には低いため、基本的には除草剤が先、中耕が後に行う。

### 7 中耕・培土

- ・初期の雑草発生が多い場合中耕で対処せず、は種 2~3 週間後に茎葉処理除草剤を散布し、枯殺を確認してからは種 30~35 日後頃に中耕する。
- ・培土は、不定根の発生、倒伏防止、排水対策、畝間灌水の効果がある。開花 1 週間前までに実施する。
- ・雑草の発生が少なく、茎葉処理除草剤を散布しない場合は、本葉 2~3 枚程度（は種 20~25 日後）にも中耕してよい

### 8 畝間かん水

- ・開花期前後の乾燥は、不稔や青立ちを著しく助長するため、中耕終了後~開花 40 日後の間に、無降雨期間が 1 週間程度続き、土が乾いてきたら畝間に通水すると、収量や品質低下を防ぐことができる。

### 9 病虫害防除

- ・べと病：「里のほほえみ」はべと病が発生しやすい。開花後から子実肥大期に（8月下旬~9月中旬）に防除を徹底。
- ・紫斑病：種子消毒と開花 20 日後以降の薬剤散布を行う。
- ・カメムシ類：開花 20 日後以降の発生を観察し、防除を行う。大豆栽培で収量品質ともに最も影響が大きい
- ・ハスモンヨトウ：8月中旬から白変葉を観察し、防除を行う。
- ・アブラムシ類：褐斑病のウイルスを媒介。種子消毒で対処。

### 10 収穫

- ・収穫が遅れるとしわ粒や皮切れ粒の発生が増加するので、収穫適期を逃さないようにする。
- ・降雨や朝露等の影響で株が濡れた状態での収穫を避け、株が乾いている晴れた日の昼頃に収穫する。

### 11 乾燥・調製

- ・作業場は常に清潔にし、施設、機械、器具も十分清掃する。
- ・子実水分が 15% 以下になるまで乾燥させる。ただし、過乾燥は割れ粒の発生の原因になるので避ける。
- ・急激な熱風乾燥は皮切れ・しわ粒が増加するので行わない。
- ・異品種や種子伝染性の病虫害粒（紫斑病、ウイルス病等）は確実に除去し、その他病虫害粒、しわ粒、裂皮粒、未熟粒はその程度により除去する。

